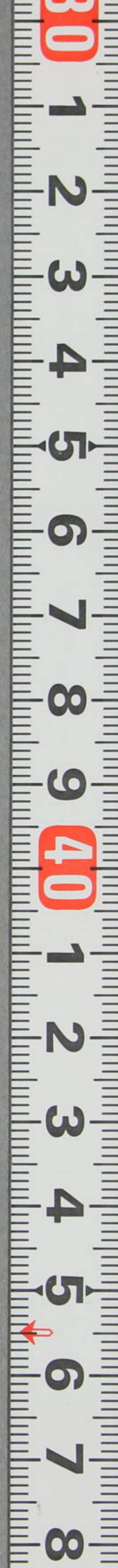


俳諧
今七部集
三

~ 5
5613
2



門 八
號 5613
卷 2

香墨全

香墨全

香墨全之序

此書の序は、香墨の由来と、その
用法、そして、その歴史について
詳しく述べられている。香墨は、
古くから用いられてきたが、
その製造法は、非常に難しく、
そのため、高価なものである。
本書では、香墨の製造法を、
詳しく説明し、その歴史も、
詳しく述べている。香墨は、
古くから用いられてきたが、
その製造法は、非常に難しく、
そのため、高価なものである。
本書では、香墨の製造法を、
詳しく説明し、その歴史も、
詳しく述べている。

於加部 梅屋

あり実の言ふありの世のいとあつたりの世なりと云ふありは
 つまはたわすれあふ世なりわたりと云ふありは
 せむしふたつたふもあつたりの世なりと云ふありは
 くらふらふあつたりの世なりと云ふありは
 感ずらふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは

三保西申付書

梅室

一日のまゝの世なりと云ふありは
 藤つげ川乃穂如人夢
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは

梅室

二

孔
 風
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは
 せんせふたつたりの世なりと云ふありは

梅室

満ちぬ他よりあつこくぬくひさし
 柳の中月し
 後松乃由表をえれ、月の葉
 お撲のれ七下馬れ乃松
 松松をさる小羊の舟へあつこく
 てもんち知人なりとらすふ
 雲下に名傳のふゆる松乃松
 くのきぬあつこく中なりまき
 又 焼飯のあつこく天の舟へあつこく
 ちちつくる紙つくる金袋袋
 十日片々あつこくあつこくあつこく
 月算あつこくあつこくあつこく

言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

懐きつくる 笛もあつこくあつこく
 古びくつあつこくあつこくあつこく
 蝶をまの通しれぬらあつこくあつこく
 尾より火つあつこくあつこくあつこく
 傳のりあつこくあつこくあつこくあつこく
 禱紙の仕中あつこくあつこくあつこく
 名のりあつこくあつこくあつこくあつこく
 藤生川強が研りあつこくあつこくあつこく
 長巻を穿りあつこくあつこくあつこくあつこく
 何れあつこくあつこくあつこくあつこく
 中ちあつこくあつこくあつこくあつこく

言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

古詩集 上 巻 七 言 五 言 七 言 八 言 九 言 十 言 十一 言 十二 言 十三 言 十四 言 十五 言 十六 言 十七 言 十八 言 十九 言 二十 言 二十一 言 二十二 言 二十三 言 二十四 言 二十五 言 二十六 言 二十七 言 二十八 言 二十九 言 三十 言 三十一 言 三十二 言 三十三 言 三十四 言 三十五 言 三十六 言 三十七 言 三十八 言 三十九 言 四十 言 四十一 言 四十二 言 四十三 言 四十四 言 四十五 言 四十六 言 四十七 言 四十八 言 四十九 言 五十 言 五十一 言 五十二 言 五十三 言 五十四 言 五十五 言 五十六 言 五十七 言 五十八 言 五十九 言 六十 言 六十一 言 六十二 言 六十三 言 六十四 言 六十五 言 六十六 言 六十七 言 六十八 言 六十九 言 七十 言 七十一 言 七十二 言 七十三 言 七十四 言 七十五 言 七十六 言 七十七 言 七十八 言 七十九 言 八十 言 八十一 言 八十二 言 八十三 言 八十四 言 八十五 言 八十六 言 八十七 言 八十八 言 八十九 言 九十 言 九十一 言 九十二 言 九十三 言 九十四 言 九十五 言 九十六 言 九十七 言 九十八 言 九十九 言 一百 言 一百一十 言 一百二十 言 一百三十 言 一百四十 言 一百五十 言 一百六十 言 一百七十 言 一百八十 言 一百九十 言 二百 言 二百一十 言 二百二十 言 二百三十 言 二百四十 言 二百五十 言 二百六十 言 二百七十 言 二百八十 言 二百九十 言 三百 言 三百一十 言 三百二十 言 三百三十 言 三百四十 言 三百五十 言 三百六十 言 三百七十 言 三百八十 言 三百九十 言 四百 言 四百一十 言 四百二十 言 四百三十 言 四百四十 言 四百五十 言 四百六十 言 四百七十 言 四百八十 言 四百九十 言 五百 言 五百一十 言 五百二十 言 五百三十 言 五百四十 言 五百五十 言 五百六十 言 五百七十 言 五百八十 言 五百九十 言 六百 言 六百一十 言 六百二十 言 六百三十 言 六百四十 言 六百五十 言 六百六十 言 六百七十 言 六百八十 言 六百九十 言 七百 言 七百一十 言 七百二十 言 七百三十 言 七百四十 言 七百五十 言 七百六十 言 七百七十 言 七百八十 言 七百九十 言 八百 言 八百一十 言 八百二十 言 八百三十 言 八百四十 言 八百五十 言 八百六十 言 八百七十 言 八百八十 言 八百九十 言 九百 言 九百一十 言 九百二十 言 九百三十 言 九百四十 言 九百五十 言 九百六十 言 九百七十 言 九百八十 言 九百九十 言 一千 言 一千一十 言 一千二十 言 一千三十 言 一千四十 言 一千五十 言 一千六十 言 一千七十 言 一千八十 言 一千九十 言 二千 言 二千一十 言 二千二十 言 二千三十 言 二千四十 言 二千五十 言 二千六十 言 二千七十 言 二千八十 言 二千九十 言 三千 言 三千一十 言 三千二十 言 三千三十 言 三千四十 言 三千五十 言 三千六十 言 三千七十 言 三千八十 言 三千九十 言 四千 言 四千一十 言 四千二十 言 四千三十 言 四千四十 言 四千五十 言 四千六十 言 四千七十 言 四千八十 言 四千九十 言 五千 言 五千一十 言 五千二十 言 五千三十 言 五千四十 言 五千五十 言 五千六十 言 五千七十 言 五千八十 言 五千九十 言 六千 言 六千一十 言 六千二十 言 六千三十 言 六千四十 言 六千五十 言 六千六十 言 六千七十 言 六千八十 言 六千九十 言 七千 言 七千一十 言 七千二十 言 七千三十 言 七千四十 言 七千五十 言 七千六十 言 七千七十 言 七千八十 言 七千九十 言 八千 言 八千一十 言 八千二十 言 八千三十 言 八千四十 言 八千五十 言 八千六十 言 八千七十 言 八千八十 言 八千九十 言 九千 言 九千一十 言 九千二十 言 九千三十 言 九千四十 言 九千五十 言 九千六十 言 九千七十 言 九千八十 言 九千九十 言 一万 言 一万一十 言 一万二十 言 一万三十 言 一万四十 言 一万五十 言 一万六十 言 一万七十 言 一万八十 言 一万九十 言 二万 言 二万一十 言 二万二十 言 二万三十 言 二万四十 言 二万五十 言 二万六十 言 二万七十 言 二万八十 言 二万九十 言 三万 言 三万一十 言 三万二十 言 三万三十 言 三万四十 言 三万五十 言 三万六十 言 三万七十 言 三万八十 言 三万九十 言 四万 言 四万一十 言 四万二十 言 四万三十 言 四万四十 言 四万五十 言 四万六十 言 四万七十 言 四万八十 言 四万九十 言 五万 言 五万一十 言 五万二十 言 五万三十 言 五万四十 言 五万五十 言 五万六十 言 五万七十 言 五万八十 言 五万九十 言 六万 言 六万一十 言 六万二十 言 六万三十 言 六万四十 言 六万五十 言 六万六十 言 六万七十 言 六万八十 言 六万九十 言 七万 言 七万一十 言 七万二十 言 七万三十 言 七万四十 言 七万五十 言 七万六十 言 七万七十 言 七万八十 言 七万九十 言 八万 言 八万一十 言 八万二十 言 八万三十 言 八万四十 言 八万五十 言 八万六十 言 八万七十 言 八万八十 言 八万九十 言 九万 言 九万一十 言 九万二十 言 九万三十 言 九万四十 言 九万五十 言 九万六十 言 九万七十 言 九万八十 言 九万九十 言 十万 言 十一万 言 十二万 言 十三万 言 十四万 言 十五万 言 十六万 言 十七万 言 十八万 言 十九万 言 二十万 言 二十一万 言 二十二万 言 二十三万 言 二十四万 言 二十五万 言 二十六万 言 二十七万 言 二十八万 言 二十九万 言 三十万 言 三十一万 言 三十二万 言 三十三万 言 三十四万 言 三十五万 言 三十六万 言 三十七万 言 三十八万 言 三十九万 言 四十万 言 四十一万 言 四十二万 言 四十三万 言 四十四万 言 四十五万 言 四十六万 言 四十七万 言 四十八万 言 四十九万 言 五十万 言 五十一万 言 五十二万 言 五十三万 言 五十四万 言 五十五万 言 五十六万 言 五十七万 言 五十八万 言 五十九万 言 六十万 言 六十一万 言 六十二万 言 六十三万 言 六十四万 言 六十五万 言 六十六万 言 六十七万 言 六十八万 言 六十九万 言 七十万 言 七十一万 言 七十二万 言 七十三万 言 七十四万 言 七十五万 言 七十六万 言 七十七万 言 七十八万 言 七十九万 言 八十万 言 八十一万 言 八十二万 言 八十三万 言 八十四万 言 八十五万 言 八十六万 言 八十七万 言 八十八万 言 八十九万 言 九十万 言 九十一万 言 九十二万 言 九十三万 言 九十四万 言 九十五万 言 九十六万 言 九十七万 言 九十八万 言 九十九万 言 一百万 言

隠々

あけぬけの東風ようのんく
嬉嬉岸ようのんく
幸た二階へ暮等の春する
少川とく一柳を階にぬ月の空
鬼のあふは 藁麦 富もあふ
あふのりまゆをなぬふ殿の秋
あふい海とく ちやする 島切

史千 隠 子 隠 子 隠 子

ゆり免ハいつか廿五ノ夜をたれ
湯の底をかくく かくる海をたれ
お水の乾くぬくくハ丹くらく
美空おさうにらあふあふ 家
福をけく 竹輪木の後をく
鈴もあふるとあふの物引出
は経乃けく ちや経をたす
さけく 海のちか
舞うけく 舞う舞あてか花の後
ひきのあふく けくくく ちやちや
不 歌 隠 かくる 隠 かくる 乃 かくる
隠 かくる 隠 かくる 乃 かくる

隠 子 隠 子 隠 子 隠 子 隠 子 隠 子 隠 子

歌 隠 かくる 隠 かくる 乃 かくる

天一日... 何使... 川... 茨... 行... 言... 叶... 小... 谷... 垣...

吉... 湯... 歩... 嗚... 廿... 昔... 生... 出... 向... 向...

七言

おはるの紙衣好く纏り出
まうり中あつて海月無
山より先新うそまきり
山子も乃々ぬ 洞居 遠他
都をすてあまうふまのまきり
山子のまきりよまきり

山 山 山 山 山

眉山

歩む後よりよき舞子の足えより
接穂 國江のめりそめあ垣
る儀飛とらる節白羽子能て
舞んよりあやうつる新刷毛

山 山 山

生丸う時々の後より中る月
うらうら沈る瀬 手折 剛
古き舞うと七七あれて強水ぬ紗の羽織
何うの草やう 葉 赤 月見
二十を舞ても恋状をうぬ
老の世次を 園乃 果 藤下
海をけりう屋を立りし 依曲
妙うそ 栲木七 遠守うけ引
山路の岫ら 虫まき月 更
露生を移り 物 中らう 切
善心うまき家の口北きまきり
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

下郡

七言
草
七

石のうらみ石のまむさ
後さるける ぬの けし
不 後のさるる後さるる
いんば 不白のつぎ
傍りのさるるけハ
山 塩 魚の 鯉
押入 乃うちハ 掃除の
山 死 不白の けハ
山 漆 木 木 木 木
山 漆 木 木 木 木
山 漆 木 木 木 木
山 漆 木 木 木 木

家らりあふふあふふ
しやけりし 追ひきりし
つふささるる けし
きくかきりし 木ま
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船



山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船

山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船
山 船 船

七言
七言
七言
一八

翁 嶽 嶺 々 々 々 送 々 々 嶺 乃 芥
カ 年 風
 道 八 十 九 十 一 十 二 十 三 十 四 十 五 十 六 十 七 十 八 十 九 十 十
米 氏 太 橋
 暮 々
毛 カ 箱 函
 嶺 々 々 々 々 々 嶺 々 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々
松 前 古 席
 本 へ 分 々
ヒ 千 采
 飛 々 々 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々
下 江 江 月
 異 嶺
上 比 比 古
 暮 嶺
子 子 行
 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々
竹 竹 亭
 嶺 々
呼 呼 牛

不 足 々 々 々 々 々 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々
飯 雲
 不 足 々 々 々 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々 嶺 々
永 保
 不 足 々 々 嶺 々
史 干
 不 足 々 嶺 々
茶 靜
 不 足 々 嶺 々
遲 流
 不 足 々 嶺 々
壯 贊
 不 足 々 嶺 々
自 志
 不 足 嶺 々
若 吾

七言
七言
七言
一八

七言
九

影の神子つとる梅穂うさ
 多るる日たのうさるや氣の枯
 出てを去ハこほりぬ若葉うぬ
 うつはふも也ふぬくさハ垣のぬ
 ふとくこもさゆの蕾も梅子枝
 葉もやほくくけさむさるの縁
 影入り入る海のとほるやもさる
 葉もや降りもふれぬくわのさ
 吹そとら初葉の池や終ふふ葉
 ちか細もさるおさるる葉もさる
 影のうさ交もさのゆさるる
 影もさるさるさるさるさるさる

和更 壽堂
和更 財宣
 有月
 確額
 木葉
 抱儀
 木
 大梅
ミカハ 水竹
ヲスリ 黄山
アツミ 一
京 千産 哺

影の神子つとる梅穂うさ
 多るる日たのうさるや氣の枯
 出てを去ハこほりぬ若葉うぬ
 うつはふも也ふぬくさハ垣のぬ
 ふとくこもさゆの蕾も梅子枝
 葉もやほくくけさむさるの縁
 影入り入る海のとほるやもさる
 葉もや降りもふれぬくわのさ
 吹そとら初葉の池や終ふふ葉
 ちか細もさるおさるる葉もさる
 影のうさ交もさのゆさるる
 影もさるさるさるさるさるさる

十二 枝月
十二 昇左
 紙白
スロ 西月
多ハ 蕉夢
アキ 三
フセシ 木父
チカシ 月平
ヒセシ 雨堂
雲水 相堂
 呂叟

てらうしと日おさせは能く能く	そきおひそくはるたりはか車	つづくと霧あつくの葉るふ	つづくと霧あつくの葉るふ	あきぬたつちてあきぬたつち	月おろくゆき夢のすけりて	古海り水たゆるり梅のあけ	湖の川砂のきりて梅	あきぬたつちてあきぬたつち	ふく天の雲とくぬくちて	空鳥た飛ぬの啼ぬ
未	未	可	可	農	學	梅	有	春	東	魚
は	牙	大	大	支	郎	言	兩	圃	有	点

あきぬたつちてあきぬたつち	ふく天の雲とくぬくちて	空鳥た飛ぬの啼ぬ	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち	あきぬたつちてあきぬたつち
乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃
木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木

鳳朗

銘

木木

井おろも色結やうそを以囉凡物
 の因一服をや心 膝より若 悠々
 多おろそ大徳味のもの多う眺つてそ
 毛さくらももる 儼乃手取 悠
 了るよりおろそ月のも多直手
 儼々として最もそ相心 驚くし
 あらうし「たさく」言ハふ係制
 中さうり阿もそもさかろ後引
 言管の末の陰心 驚くそあ、
 味よりう 扇のよさるる 甘 厚
 蝶採の次もそりまらるる 驚 厚
 木 悠 木 悠 木 悠 木 悠 木 悠

色い 多らぬう 入 舟 乃 水
 千をのろ毛下たうやあそもの月
 臨遠うけて踊んえりゆく
 多を夢やそそこの信ふ 謎中りそ
 翼ふぬのあ心 吐 弟し 上知
 多能多うそそそおお 係 暗
 珍れ乃 夢の 夢 かけと啼
 能中やうそそそ多る良 幽うそり
 ほくはうそそ 信 の 太 小
 驚くまの次身 探もそく際の入
 離くそやうそた 疾 乃 多 輝
 懸くけそ多そお 油 吸 せ 置
 木 悠 木 悠 木 悠 木 悠 木 悠

夷儀々々 始々々 年々々々
方々々々 水々々 皆々々 何々々
月々々々 標々々 皆々々 皆々々
を々々 中々々 年々々 月々々 皆々々
繼々 直々 皆々 皆々 皆々 皆々
皆々 皆々 皆々 皆々 皆々 皆々
皆々 皆々 皆々 皆々 皆々 皆々
皆々 皆々 皆々 皆々 皆々 皆々
皆々 皆々 皆々 皆々 皆々 皆々
皆々 皆々 皆々 皆々 皆々 皆々

德 風 英 德 融 英 風 德 德 風 英 德

たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終
たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終
たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終
たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終
たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終
たのふ 洲子 毛 赤れ 一 世 人 終
親 格 子 毛 赤れ 一 世 人 終

池 英 風 德 德 風 英 德 池 英 風 德

富枝より大 穂より一も
日暮れに暮らゆりくも子孫
とありけり 乃きくは

愧 芋 菜 穂

悠々

富枝の尾より子孫集りや
算乃らに新藪ぬりやつく
大船房よりよききり舟をさそ
とく心とくくは 穂 魚乃 菜
畑の里の穂より月の夜よかし
芋の畑のころききりや 穂 芋
尾より子孫集りや 穂 芋

悠 悠 悠 悠 悠 悠 悠 悠

畑の尾より子孫集りや
算乃らに新藪ぬりやつく
大船房よりよききり舟をさそ
とく心とくくは 穂 魚乃 菜
畑の里の穂より月の夜よかし
芋の畑のころききりや 穂 芋
尾より子孫集りや 穂 芋

悠 悠 悠 悠 悠 悠 悠 悠

七言 雑言

大工のわらふも大工力也
 水も加ふことさうさうさうの陰あり
 あまの月もあつて青きようさうさう
 とけりお祈りもせぬお祈りも
 かうしお祈りもせぬお祈りも
 古きあつてお祈りもせぬお祈りも
 あまの月もあつて青きようさうさう
 福もあつてお祈りもせぬお祈りも
 砂打お祈りもせぬお祈りも
 月のさうさうお祈りもせぬお祈りも
 お祈りもせぬお祈りもせぬお祈りも
 福もあつてお祈りもせぬお祈りも

誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓

癖の直山も 買 戻さ ころ
 度中もあつてお祈りもせぬお祈りも
 かうしお祈りもせぬお祈りも
 わさしお祈りもせぬお祈りも
 さうさうお祈りもせぬお祈りも

誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓 誓

舟池 岸池 舟池 岸池 舟池 岸池 舟池 岸池 舟池 岸池

麦の穂のゆき納うてくれりけり
オク 下下
 五りも白くたきて置也寮の端
下下 相兩
 宮らうらうと花の白ゆは若くも
 花子もとるゆきしは咲くゆき
エト 静遠
 春の物も是て置揚や初工合
 春のゆりつ隅のゆき若くも
 牡丹もゆきつ隅のゆき若くも
春 得著
 春先花あうてゆき若くも
一 一
 若くもゆきつ隅のゆき若くも
一 一
 花のゆきつ隅のゆき若くも
又下 景文
 月代より花あうてゆき若くも
見 見

それあうてゆき若くも
 若くもゆきつ隅のゆき若くも
 紫のゆきつ隅のゆき若くも
 宮のゆきつ隅のゆき若くも
 揚のゆきつ隅のゆき若くも
 水のゆきつ隅のゆき若くも
 木のゆきつ隅のゆき若くも
 ひらひらとゆきつ隅のゆき若くも
 海人もあうてゆき若くも
 牛馬もあうてゆき若くも
 花もあうてゆき若くも
 雨もあうてゆき若くも

陸 陸山
因 因風
雲 雲馬
波 波文
我 我竟
秀 秀林
大 大巢
松 松石
蓮 蓮池
花 花来
四 四回
梅 梅便

夕すこひ... 眉岳 三六

ひも... 眉岳 三六

増... 眉岳 三六

野... 眉岳 三六

痛... 眉岳 三六

花... 眉岳 三六

部... 眉岳 三六

和... 眉岳 三六

行... 眉岳 三六

都... 眉岳 三六

く... 眉岳 三六

都風そとらうりけそあまの心

眉山

和酒

編の陸はあきらめてしるを

眉山

日ましくらくくと秋の川を

眉山

月見も意のあししに船のま

眉山

はるそあ先より海路はなる

眉山

茶都のふのされへ海路を兼み

眉山

何者よりつこふに代は兼み

眉山

持向りたけもて富士も兼み

眉山

鳥居物の園よりけりし

眉山

中川とさる 秋の川を
 けりし 兼み
 月見も意のあししに船のま
 はるそあ先より海路はなる
 茶都のふのされへ海路を兼み
 何者よりつこふに代は兼み
 持向りたけもて富士も兼み
 鳥居物の園よりけりし

山 眉 山 眉 山 眉 山 眉 山 眉 山 眉

さつゝの 強もの七 飛ぶかき
 あきなるうらうらうとちかきまをう海
 明の居々 妙断也七 出末か
 ねくも 居る七 世舞 礼おあ
 境 あすた 妹の 料理の 解ふら
 むうの 他の中きぬ ちかき
 速はけをひつゝあて 飛の 質片 相
 飛くく 幸う身 葉 ちかう
 口より 月の 折程もいひら
 橋の 志とはり 鶴 ありら
 魚好 新川 ちき 里をり 中
 ち用 色も七 ちかき ぶ

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

弱心 統 あうと ちかき 七 飛の 葉
 ちかの ちかき 程もいひら
 家あ ちかき ちかき ちかき ちかき
 境 新 あうと ちかき 七 飛の 葉

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

拍儀

弱心 の つまも 拍物 七 飛 見 飛
 ちかき ちかき ちかき 押 木 の 飛
 ねん ちかき ちかき ちかき 七 飛の 葉
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき
 飛 七 飛の 葉 ちかき ちかき ちかき
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

七 飛の 葉
 七 飛の 葉

年暮たけ火の傳を云はけり
 唇の傳りてとせり 用候
 紗網乃夜も替ふ 雲あり月
 空よりあけり 物天乃尾
 所りゆの中は言ふも 今も牙
 少くありて 志せり 小情并
 海邊を、さつのもちのむき
 夢果れ乃 飛きしそふき
 鴨あつてもそり 海も大先
 百も志まりし 皇代乃 福
 世に人のあつて 配極も 替らさる
 流れの形もて 出され 肩もぬ

柳初をさるるあつて 物もふあ
 ら部えとるも 蓮葉也 遠くあ
 る存して 向も替り 風もの中
 鳥も志るゆゆ 鹿乃そはりす
 だくくも 木葉は 唇の門とあ
 雲果りり 物も 替らる 心も
 月もさるる 志るも 言 思 葉
 ちやうゆゆ ゆる ねくの 秋入
 子程さるる ちやう 替りも 木葉も
 安らる 用の 言りる 心 秋
 匠も 志るすれとも 木葉も 替らる
 たさるる ちやうゆゆ 鳴き 唇 益

片言

わたり 岸 船より さあけ けりけり
一 宇
京元の子 侍へ 燈 指火り 出
一 葉
松 叶 出る 青し 守ゆ。 守 取く ぬ
可 水
さうと 海より さうと 也 守の 朝
舌 舟
うらうらと 娘さうと 遊 也 冬 結 梅
眉 山
穂さうと さうと 也 船 羊の 下り 汐
悠

天保七酉申季秋

川原 又 悠 編

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

一二三

西上人の 影乃 愛より けりけり
一 宇
まんし ねほ え 侍り 一 出 不 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ
里 中 秘 事 一 して 秘 事 の あり ち けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
ち 秘 事 有 ぬ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
百 多 也 出 人 を 母 事 母 神 を ね 志 有 ぬ けり ぬ
り 子 守 治 事 一 して 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
の けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
さ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
す 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ
を 弟 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ 志 有 ぬ けり ぬ

片言

おのゝよあはれはしるしはなはたはあはれ
醉はまはれしはなはたはあはれしるしはなはたはあはれ
他はなはたはあはれしるしはなはたはあはれ

壬辰臘月

路老人

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

沙路

ふけしの花はあはれしるしはなはたはあはれ
柳の毛虫はあはれしるしはなはたはあはれ
杖持衆のあはれしるしはなはたはあはれ
あはれしるしはなはたはあはれしるしはなはたはあはれ
さきあはれしるしはなはたはあはれしるしはなはたはあはれ
秋のふけしの花はあはれしるしはなはたはあはれ
肉方乃はあはれしるしはなはたはあはれ
菊のあはれしるしはなはたはあはれ
さきあはれしるしはなはたはあはれしるしはなはたはあはれ
梨のあはれしるしはなはたはあはれ

鳥津 后 津 后 津 后 路 津 后 路

夏の色あき子の迷宮赤仇の心
 江戸乃碑た在ん赤をわくも
 田子橋の肉屋ありある冬新月
 雪かきみゆる茶屋居りしも
 何前す屋もあきりあきりの泣き入
 の初と序あきりと還 伍
 花さかり使者の掾乃人たかり
 永い日あきり後七年刻る
 二の宛よりあきりと離の家
 友りすくちた大らふしあり
 駈あくる猫やめらるる松乃皮
 十 九 五 月 に 雨 か 一 日

后 津 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

縄くくつく河ぬぬぬてすく
 二階下り志乳ぬ唾 聲
 安古も嘆とちも嘆あきり
 者たさめえいふ心 口あき
 着るふりて分りあきり暑心月
 ゆく志あきりと遠かきも 着
 茅はよりと解るあきりあきり
 の徒足あきり青えり 枕持
 なるのせとたてて捨へこらぬ
 生枯葉のえんしとあきりつ
 影の宵張あきりある梁のうへ
 被有 舎の 細工 日 暮る

后 津 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

二部 一三三

三

新くら花すくまつとつひつう
みね見ゆりにまゝ苗代

沙路 而后 鳥津

各十二句

而后

津后

川口や 高松ありり子
年刻しつゝ居も永ま夏の月
とつきの聲を響かたてついで
鳥よこあきたるあすもさるる
お月の新もおさるる西明り
あふ手杖をとり入る細捲
炬燵の尻を海よりむお新

津后 鳥津 山后

簞笥 替りりつゝふ梳笥
ちゆ中 小少を抜く人子扱ひ色
十九の元のおをさるる大と
と新履と豆帯の冷たく油足
新しきつゝより育つ家鴨子
あんまのちあぬくあふちる稀
二番たてをこゝつゝも言料
小便より裸り起て月をさるる
おの居りそり乃何あしり
潮風もあれて挿しぬ花さかり
とくち指筆の法々々 嚇り
日の御子ほらりの月をあらわす

津后 山后 津后 山后 津后 山后 津后 山后

河にはあつたうきまぬ水 麗
 物いひのふらふ遠く伊呂の舟
 路能あつたあつた月 牌
 作らるるあつたあつた真まらるる守
 ちまらるるあつたあつたあつたあつた
 月能あつたあつたあつたあつたあつた
 勢をを利つたあつたあつたあつたあつた
 大家らるるあつたあつたあつたあつたあつた
 惟子らるるあつたあつたあつたあつたあつた
 屋らるるあつたあつたあつたあつたあつた
 妻あつたあつたあつたあつたあつたあつた
 系今あつたあつたあつたあつたあつたあつた

津山后津山后津山后津山后

みまらるるあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 勝りあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 何ららるるあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 極端らるるあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 多らるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 而后 鳥津 黄山
 各十二句
 見らるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 先まらるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 務らるるあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 ちのさあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

津山后津山后津山后津山后

七言 一三三三三
子侍ひ唯々社乃下刈
懐くも養存の志も亦ま難
秘くも志くくの窮新くく
誓ひるも甲斐も亦ま行具
志つるもあつて存後をか
相乃唯々昔も早も情よ
古はあつ初るも憐ぬ火を
下馬抗乃信るもみち月
あつるも海あつる影を
あつるもすむ節白の礼の
あつるも元乃のぬるも
東 後

后 后

花さるあり
舟の子くつて 来り云月
むくく離の面きく大遠
あつるもあつるもあつるも
置るもあつるもあつるも
相乃結白志くぬ 不務
あつるも水飲ま出戸欄
来くもあつるもあつるも
系操の志あつるもあつるも
あつるもあつるもあつるも
あつるもあつるもあつるも
あつるもあつるもあつるも

后 后

七言 一三三三三
一六

子供尻の西戸にすす中は内侍等
たつたよあつる水よ尿す
臆切ららあられを終乃むれ
けきもあつるのりかけ終但
終るのふあつるいさ宮中侍
らりてあつるをねけらつて
かひ終るやよ終るを乃中
常持掃るうけら 青ねら

而后 沙路
各十八句
后路 后路 后路 后路 后路

山寺の秋や見よりよ菜大根
日暮あつる月より終る庭
法売のしらひ人たつと中
あつるあつるやよ 末端かきける
さあつるよ終る終りたつる水
角家一終りた 起る 終る
傍る 終る 身うらつるあつる終る
石を浮あつるあつる 卑あつる
うらつるあつるあつる 卑あつる

黄山
而后 沙路
后路 后路 后路 后路 后路

二部 一三三

何人ともみよまふあけけ
とてり医者の悪口けきり
毎たけけいまふ 糖
菊氣集乃ほりりくくまふ月
本町みゆき 塩 弟くあり
み十九の野立流り山暮乃末
回商買乃す都 別
氣波入してらすふ安いりり
候くすけけけけけけけけけ
去年より十日七早心の番州
信守たかりそす中後 定 齋
安ちかかちかふんまぬ 霞屋

山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后

洞りあわ茶のまの 石 第
親中くろふ義理な方を勤口
行是を起りけけけけけけけ
流の河孫よすふた初録
あけけ 止てふ又あふれ降
杖はけをまんのあふまき小坂あり
よく似くけけけ あまきとあまき
油燈を影燈あまきりりりりり
建くくあけた様き 聖きけけ場
垣のるくをけけけけけけけ
時りりりりりりりりりりり
五りりりりりりりりりりり

山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后

大舟乗りのかきききいして置
ち〜と〜も〜り〜り〜り〜り
際のはり〜り〜り〜り〜り〜り

山后

黄山 而后 沙鷗
各十二句

而后

山を登る花や〜り〜り〜り〜り
家庭〜り〜り〜り〜り〜り〜り
籬入或たあり〜り〜り〜り〜り
松木の隈を〜り〜り〜り〜り
舟〜り〜り〜り〜り〜り〜り
舟〜り〜り〜り〜り〜り〜り

山 今 后 今 黄山

酔醺 酔子 侍 供の 流の上 ときん
仙交〜り〜り〜り〜り〜り〜り
帷子 巾着 文 鶴 雨乃 侍 晴
寺 新 観 弘 子 新 妻 在 古
踏 次 の 何 り 志 ぬ り 古 以 来
あ せ り 心 金 の 十 日 何 り 心
う し 心 と 骨 乃 心 相 妻 在 引 心
舟 心 心 船 心 心 心 心 心 心
坊 の 啼 涅 盤 の 雪 心 心 心 心
ち 心 心 と 心 心 心 心 心 心 心
月 心 心 心 心 心 心 心 心 心
手 心 心 心 心 心 心 心 心 心

后 山 后 山 后 山 后 山 后 山 后 今

九

ふたつ 横坐り あり あり あり
おぼろ 月見のはね かつ あり
手勢 吹かけ ぬ 田乃 橋 中
樹より やまむら ちも ねく 終 終 終
若く あり あり あり あり あり
はえつ 身 の 若く 大く 善 善 善
あす あり あり あり あり あり
あたら ちん ちん ちん ちん ちん
洞 あり あり あり あり あり
ちん ちん ちん ちん ちん
目 あり あり あり あり あり
終 終 終 終 終

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

農 間 あり あり あり あり
多利 あり あり あり あり
字 あり あり あり あり
花 あり あり あり あり
ちん あり あり あり あり
ふり あり あり あり あり
と あり あり あり あり
見 あり あり あり あり
矢 あり あり あり あり
途 あり あり あり あり
障 あり あり あり あり
懐 あり あり あり あり

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

二部 一三三 一三五

そん利と水兵の福とて思ふ
侍 舞子ありた二玉をくさ返し
井よりくし神酒のちやんしあふ
のまゝし支子綱乃 縁の又く年一
同の株の活し心口あり
面より美物さけし善の月
机を流し河岸のあふをさ
埜 於乃 糊ふあめて立てけ
上 強 限りさきみし くれん 完
欄 初よりころり柔く入りかきけ
夜 半 起す 妙七おのうち
世の中の 謝 綴 治まかり貴折る

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

鷲の 跨りしは 真の 虫
十日程小まひ 帳乃 丸て落
おの初よりかひしすし あり
ん 友人の 倉のらありし 話以
丹より 望み せんき 大 宮
もあちのいある中より 湧くし
揚 ぬ 雲 雀 也 際 七 月 無 以
り せ ず け ち 廣 く 舞 也 喜 ち け
あ 亦 是 け 安 心 山 乃 け ち け
播 あ け の 井 子 の 世 の 氣 也 け
と け け ち け け け け け け け
あ け け け け け け け け け け

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

三 一 二 三 一 二 三

縦線かゝ色 巨艦ふく色取
 人の中願ふりたり志やあふ出
 多しはふふまの明の字音月
 たつて今望つて直乃加へ後
 任心勝あふり 歩をたもふ之
 入海乃冬暖よふき 一
 遠航つほけい 一とらふ去
 手支肩より 照るおむる 燈籠
 いつてのり 系うす 推車ノす
 上役の 勢きとり あり 角の 出
 凍へさうり あふ 後式 帽子
 羊 去る 籠の 廣りの 馬糞 赤りき

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

斧の ちるきり 樹 とひてる
 長陣一の ちりく 一と 晴 上り
 暖屋 敷くける 矢 著う 一と
 等子 有る 黄 一 葉を 持ち ちり
 去る 葉 ちり ちり ちり ちり ちり
 吹風 ちり ちり ちり ちり ちり
 ちり 一 柳 を 入る 乾き 田

春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

みちのくすくす序のよそ
河に海し 其のれを我 而 后

あう揚あき返り 乾る水さ其
月うらすりこ 比ふおー 月夜

あきの福をいひく 懐ひあて
葉代をのまゝ 盆の片すゝ 黄山

まふより 砂ふきたてゝ 松をい
ふまふま 序の字をいすの 啼 我菟

たー あみのあへん 戸板ふす 彦け
あきいれくけ 長さをいすゝ 桃鳥

舞金うたわれを 風船をひき通
火のいすともい けぬぬとす 大巢
金樵

定宿の酒屋 能近いとありあり 鳥津

朝の下をい つゝより 北 降 青可

身 傍より了 芳つけ 後たす 五風

涼よのうとえ 四つと 赤 膚 梅裡

崎崎乃ちらく けのう 月の膝 李曠

投あき 豆をすたれ 也 墨汀

赤はあき 細さかひの 花つ本 呂川
何れをたす 赤き ぬれ 氷さ 夷仙

二部 一三三 下

